

2022年度 入学試験 **国語** 問題冊子

早稲田大学系属 早稲田渋谷シンガポール校

試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かず、下記の注意事項をよく読んでください。

注意事項

1. 問題は、本冊子の p. 1～p. 28 となります。
2. 解答は、別紙の解答用紙に記入してください。
3. 「始め」の合図があるまで、問題冊子、解答用紙を開かないでください。
4. 監督者が「始め」の合図をしてから、問題冊子と解答用紙に、受験番号と氏名を記入してください。
5. 解答中に何か用事がある場合は、黙って手をあげてください。
6. 解答中に問題冊子や解答用紙の汚れ、印刷の不鮮明な箇所に気付いた場合は、黙って手をあげ監督者に申し出てください。
7. 「止め」の合図で筆記用具を置き、監督者の指示に従って解答用紙の回収を待ってください。
8. 問題冊子も回収します。持ち帰らないでください。

※ 解答上の注意

文字は、明確に（丁寧に・十分な大きさと・濃く）記しなさい。
字画（漢字を構成する点や線）が認められない場合には、不正解または減点の対象になります。

| 受験番号 | | | | | | | 氏名 |
|------|--|--|--|--|--|--|----|
| | | | | | | | |

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

歴史の主観性と客観性という問題は、前章の過去への手がかりの最後に、史料の解釈という ^a ソウ作を解説いたしました際にすでに触れたところのものであります。わたくしはそこで史料の解釈に当たってはわれわれの主観を勝手に史料の中に持ち込んでほならない、つまり、史料を書いた人の気持ちを尊重しそれに従って解釈を行わなければならないということを申したのでありますが、この問題から、わたくしどもの歴史研究にいつもついてまわるところの、歴史における主観性と客観性という問題が起こってくるのであります。

まず第一に問題になりますことは、歴史の材料である史料を研究いたしましたして、そこからわたくしどもが間違いない真実を引き出すことができたかと仮定いたします。それで仕事が終わったのかと言えどももちろんそうではありません。そこから出てまいりましたのは単なる事実でありまして、これを年代の順序に配列したところで、それで歴史ができ上がるわけではなく、ただばらばらの事実がそこに年代的に並んでいるということにすぎないのであります。

A、学者によりましては、こうして集められた事実相互の連 ^b カン^{||}をたどるならば、そこにおのずから歴史が生みだされてくると考える人がなくはないのであります。十九世紀にはこういう考えがむしろ一般的でした。しかし、いまでも実証的な歴史家の間には、いぜんとしてこの考え方が根強く続いているようであります。この人たちの考えの基本になっているのは、史料の中に主観を読み込んでほならないという前章いらい申し上げていることで、それとしては決して誤りではないこの史料解釈上の戒めを、その適用限度をこえて、歴史学全体の原則と考えているのだと思われます。このタイプの歴史家たちは、各自の個人的な考え方をできるだけ消し去り、史料から得られた事実をして自ずから語らしめるといことが歴史の最大要件である、と申します。これはいかにももつともらしいことのようにありますが、二重の意味で間違っているといわなければなりません。

第一に、歴史の史料と申しましても、その種類は非常にたくさんあります。文字で書かれた叙述史料のほか、それ自体と

しては何事をも語らない遺物的史料もあります。考古学・古泉学をはじめとする歴史補助学のあつかう資料はこのたぐいであります。また文字で書かれているとは言っても各種の証書類はあまりに具体的な事実に密着しており、その一つ一つはいわば歴史の断 c ペンにすぎません。このような証書やその他の遺物的史料を説明し、それぞれ歴史の中に位置づける役割をもつ年代記、伝記、覚書等々の叙述史料も、それぞれ史料作製者の主観によるところの考察、その作者の主観による、それぞれの時代における歴史であり、そこにはすでにその人々による事実の選択、取捨が働いてでき上がったものであります。

しかるにこれらの作者の主観は、われわれの主観、われわれの考え方、あるいはまた、われわれの問題の意識と同じであるという保 d ショウはどこにもない、というよりも、B、原則上、常に違っているのであります。従って、それは他の

遺物的史料の説明の材料ではありませんが、その説明は直ちにわれわれを満足させうるものとはなりえないのでありますし、又何等説明を与えない場合も少なくないのであります。そこで、過去の事実というものは、われわれがそれをある文脈の中に引き入れて語らせるのでなければ、決して、それ自ずから語るといふこと1 ではないこと1 になります。ですから、「1 事実1 は自ずから語る」ということは、一つのレトリックであり、そのまま真実をあらわすものではないのであります。また、歴史家がときどき自分の叙述した歴史の中には、C 一行たりとも史料に基づかないところはないといったことを誇らしげに書く場合がありますが、これもまた文飾にすぎないか、さもなければ、(注1) 自己欺瞞(まん)以外のものではないのであります。

第二に、2 歴史家は自らの主観をけして、事実をして自ずから語らせるべきではないかといったこのような問題の立て方自体が、そもそもおかしいのであります。と言うのは、わたくしどもが歴史を書くこととして、史料にぶつかりますときには、何も「犬も歩けば棒に当たる」といったやり方で史料を探求するわけではないのであります。むしろ、史料を探求するときには、すでに、われわれ自身ある意図をもっておりまして、それに従って史料に当たって行くのであります。その意図をわれわれは、仮説と称(よ)んでるのであります。それを常識的な言葉で予想といってもよろしいのであります。この頃流行のミス터리(り)で言いますならば、およそセオリーなしに犯罪捜査に当たる探偵や刑事がいけないのと同じことD あります。歴史家もたとえばこの時代ではこういうふう(う)にことが運んでいくはずであるとか、いく可能性があるとか、そういう仮説を立て

て、史料にも当たる。そして史料は、全部そろっているとは限っておりませんから、史料を発掘し、発見していこうという場合にも一つの予想がなければ史料そのものも出てくるものではない。むしろ古来偉大な歴史家と称ばれた人々は、そのような史料の探求の仕方において、予想の立て方、仮説の立て方が非常に e タクミであったために、有力な史料を引き出すことができた、発見することができたと考えてもいいのであります。そのような意図というものなしにはわたくしどもの歴史研究の作業は、そもそも成り立ちませんし、**E**、それなしには歴史を書くこともできないのであります。

ところで、この歴史研究に先だつ、予想や仮説がはじめから終わりまで同じでなければならぬ、というよりもむしろそれは、歴史研究の各段階において、常によりよくされていく、より客観的な真実に近づいていくというふうには、たえず改善されていかなくはなりません。ところが問題なのは、わたくしども、人間でありますから、一番最初に立てた予想にとにかく執着するかたむきがあることであります。とくに研究は一人で行っているわけではなく、いろいろな人と競争しながらやっているのが普通でありますから、他人の考えよりも自分の考えの正しさを証明したくなるのは人情であります。

したがって、歴史研究の進展に従って、仮説は改善されるよりも、むしろ、固執されるという傾向がつよく、その結果、無理な、(注2) 恣意的なという意味での主観的な解釈におちいるという結果を生みだすことになりがちであります。これは非常にまずいことでもありますから、そこで実証的な歴史家たちの中にはそもそも解釈を最初から歴史の研究に持ち込むことが間違いであります。むしろ、そのような解釈、つまり主観を消し去って、史料が語るところを、そのまま語らせるのが歴史研究の正しい態度であると考えようになつたということができるのであります。

しかしながら、間違っているのはその歴史家の仮説であるか、ないしは、その仮説に執着することでありまして、仮説を立てることそのものがいけないというわけではありません。仮説なしにわたくしどもは歴史については何事もなし得ないということ、これはセオリーを持たぬ探偵が、いくら現場をみ、街を歩いても何一つ発見しえないのと同様であります。

3 これが歴史の主観性と客観性という問題になる第一の点であります。

(堀米庸三『歴史をみる眼』による)

(注) 1 自己欺瞞——自分で自分の心をだますこと。

2 恣意的——気ままな、自分勝手なさま。自分の好きなように振る舞うさま。論理的な必然性がないさま。

問一 二重線部 a 「ソウ(作)」・ b 「(連)カン」・ c 「(断)ペン」・ d 「(保)ショウ」・ e 「タク(み)」について、同じ漢字を用いるものとして正しいものを、次の各群の A～E の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

a ソウ作

- ア 代替わりを機に悪習を一ソウする。
イ ソウ業家一族が経営陣から退く。
ウ 諸般の事情をソウ合的に判断する。
エ 未確認飛行物体にソウ遇する。
オ 信念も節ソウもなく流行を追いかける。

b 連カン

- ア シューベルトの未カン成交響曲を聴く。
イ 人権問題にカン心を寄せる。
ウ 初志をカン徹することは難しい。
エ 難しくないが、若カンの訓練を要する。
オ 冬眠期カン中は体温を下げる動物がいる。

c 断ペン

- ア あの国は日本以上に学歴ヘン重社会だ。
イ 直角三角形の斜ヘンの長さを計算する。
ウ ヘン言隻句を問題にすることはありません。
エ 借入金のヘン済計画を説明する。
オ 普ヘン的なテーマについて議論する。

d
保シヨウ

ア 首脳会談により両国外交のシヨウ壁がなくなる。
イ 臨シヨウ試験を経て新薬が認可された。
ウ 経済学部とシヨウ学部の違いが分からない。
エ 生徒シヨウの写真を入学式の後に撮った。
オ 時間がないので議論のシヨウ点を一つに絞った。

e
タクミ

ア 当座の資金をク面することができた。
イ 足がつかないようコウ妙に立ち回る。
ウ 古文ではク徳を積んだ人が助かる話が多い。
エ 華やかな意シヨウを凝らして飾り付ける。
オ 文化祭のキ画を皆で話し合う。

問二 空欄 A、B、C、D、E を補うのに最も適当な語句を、次のア～カの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。
ただし、同じ語を繰り返し用いてはならない。

ア また イ ところが ウ まるで エ たとえ オ むしろ カ すなわち

問三 傍線部 1 「『事実はずから語る』ということは、一つのレトリックであり、そのまま真実をあらわすものではない」とあるが、これはなぜか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 叙述史料は、当時の史料作製者の思考・感情に基づいて書かれているので、現代に生きる研究者の思考・習慣に基づいて解釈を加える必要があるから。

イ 叙述史料は、文字情報を含まない遺物的資料を説明しうるものだが、史料作製者の主観によって作成されたものなので、歴史研究の客観的材料にはなり得ないから。

ウ 叙述史料は、その史料作製者による事実の取捨・選択が働いてでき上がったものであり、研究者の仮説の中に位置づけられることで、はじめて歴史研究の史料としての意味をもつから。

エ 叙述史料の中には、あまりにも個別性が高くそのままでは研究者が抱える問題に答えてくれないものもあるので、研究者がそれを現在の文脈に基づいて解釈し直す必要があるから。

オ 歴史の史料には非常に多くの種類があるが、遺物的史料のような文字の書かれていない史料については、研究者の自由な解釈に委ねられているから。

問四 傍線部2 「歴史家は自らの主観をけして、事実をして自ずから語らせるべきではないかといったこのような問題の立て

方自体が、そもそもおかしい」とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 史料の探求とは、研究者が闇雲にはなくある見通しに従って行うことで上手くいくものであり、そのような研究者の主観なしには歴史研究の作業自体が成立しないということ。

イ 史料の探求の成否は、経験豊富な研究者が確かな確信をもってそれに当たったとしても最終的には運によるところが大きいので、主観云々を問題にしても意味をなさないということ。

ウ 史料の探求にあたっては研究者の仮説が、発掘された史料の解釈にあたっては研究者の価値観が、それぞれ重要になるので、歴史研究のいずれの段階にも主観が重要なのは言うまでもないということ。

エ 史料の探索にあたって研究者の予想が重要なのは言うまでもないが、その予想を上回る偉大な発見があるのが歴史研究の醍醐味でもあるので、人間の主観など取るに足らないものだという事。

オ 優れた研究者であるほど間違った仮説に囚われてしまうことがあるが、そうだからといって歴史研究における主観の重要性を否定することはできないのだということ。

問五 傍線部3「これが歴史の主観性と客観性ということの問題になる第一の点であります」とあるが、この文章全体を踏まえると、歴史研究における「主観性」と「客観性」について、筆者はどのように考えているか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 歴史研究には、研究者の恣意が過剰に反映されるために主観性は不要であり、客観性の高い史料を数多く入手して、一切主観が入る余地のない結論を導き出さなければならない。

イ 歴史研究には、史料に先立つ客観的な仮説が必要だが、仮説を証明するための、史料を歴史の中に意味づけていく過程の中では、客観的仮説に研究者独自の主観を帯びさせていかなければならない。

ウ 歴史研究には、有力な史料の発見が不可欠だが、そのためには研究者の仮説という主観が必要であるため、史料という客観性よりも主観の方が重要だと認識しなければならない。

エ 歴史研究には、主観と客観のバランスが求められ、史料解釈の過程では、高い客観性と共に、決して諦めない研究者の熱意という主観性が共存しなければならない。

オ 歴史研究には、研究者の仮説という主観性が必要不可欠であるが、研究者は史料の研究を通してその主観を改善し、より客観性の高い真理へと昇華させなければならない。

□ 高校の陸上部でスター選手として活躍していた南野悠斗は、同級生の絵梨に恋心を告白したが、「好きな人がいる」という理由で断られた。悠斗は、絵梨の思いを寄せている相手が、同じ陸上部員で、絵梨の幼なじみでもある湊みなとであると知る。本文はそれに続く場面である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

悠斗も湊も五千を走っていたが、成績にはかなりの開きがあった。湊の走りは重く、無駄な動きが目立った。悠斗から一周遅れでゴールすることもたびたびだったのだ。大会では常に悠斗の控えに甘んじ、裏方の雑事や応援に回っていた。

表舞台でスポットライトを浴びる自分の方が、レースに出場すらできない湊より優れている。そんな不遜ふそんや驕慢きょうまんが巢食っていた。選手としての実績と人間の価値を混同する愚を犯していた。

絵梨は、おれの中の鼻持ちならない驕りをとくに見抜いていたのかもしれない。

そう考えることは悠斗の自尊心に手酷ひどく堪こたえた。絵梨が傍らどころか遥か遠くに隔たってしまったと思うことは、さらに堪えた。

たった一つの失恋がたくさんの思いを教えてくれる。教えてはくれるけれど、疼うずかせもする。いつまでも癒えない傷に似て、行き場を見失った思いが疼き続ける。

悠斗は走ることに集中しようとした。走りへのめり込み、ひたすら練習に精進した。

「悠斗」

練習が終わり、ストレッチで身体をほぐしていたとき、湊に声をかけられた。

「ちょっと話があるんやけど」

「なんや」

汗を拭い、顔を向ける。ペットボトルのスポーツ飲料を飲み干す。絵梨について何か言われるのかと心が構えていた。何も

言われたくなかった。手痛い失恋から数ヶ月、悠斗は湊に対する態度を変えないよう努力してきたのだ。三人で帰ることは流石にできなかつたが、他は以前と変わらず接してきたつもりだ。それが悠斗のぎりぎりのプライドだった。そしてまた、惜しむ気持ちの表れでもあった。意味はまるで違うけれど、湊は絵梨と同様に大切な相手だ。一人を失い、さらにもう一人まで失いたくはなかつた。

湊は悠斗がスポーツ飲料を飲み干し、一息吐くまで黙って立っていた。

「どうしたんや。話って何の話や？」

1 わざと陽気な口調で湊を促す。もし、絵梨とのことが話題になるのなら、さらに陽気に「もう済んだことやで」ととぼけるつもりだった。

「あのな、悠斗。おまえ、少し飛ばし過ぎやないか」

「え？」

「練習のペース。このごろオーバー気味やなって思うて。ちよつと気になったんや」

ペットボトルを握りしめる。手の中で空になったボトルがくしゃりと潰れた。これを湊の顔面に叩きつけてやりたい。せり上がってくる凶暴な感情を息を詰めて抑える。

「心配してくれてたんか？ ありがとうよ。けど、自分のペースぐらい自分で調節できるから。大きなお世話やで、湊」

「けど、悠斗……」

「おれ、ちゃんとメニューどおりの練習をこなしてるだけや。監督さんからも別に注意とかされてないし」

「自主練もやつとるやないか。それ、監督さん知らんやろ」

帰宅してからも走っていた。玄関先に荷物を投げ入れ、そのままランニングに出る日もたびたびあった。

「晩飯前のランニングなんて誰でもやってることやし、ずっと前からの習慣や。今さら、監督に報告する必要なんてないやろが」

「前と同じなんか」

「なんやて」

「前と同じ走り方してるんか？」

スポーツ飲料の味がする唾を飲み下す。「おまえの言ってる意味がわからねえ。何、からんでるんや」と首を傾げ苦笑いを浮かべるつもりだったけれど、視線は尖り、湊を睨め付けていた。そんな眼つきをしてしまう自分にうんざりする。嫌でたまらない。

いつもなら、^a 険のある眼差しにも口調にも敏感に反応する湊が、その日はまるで動ぜず食い下がってきた。

「全然、ちがうやろ。そんな軽い走りやないやろ」

身体を宥め、冷まし、鎮め、明日に繋げる。そのためのちょっとしたランニング。おまえのやっている走りはそんなものではないだろうと、湊は言葉を突きつけているのだ。

凶星だ。

軽いどころではない。がむしやらに走っていた。部活の練習より激しかったかもしれない。頭の片隅で警報は鳴っていた。だめだ、だめだと理性が呟いていた。けれど、従えなかった。感情が抑制できない。

走れ、走れと、感情が肉体を煽る。走り続ける肉体が感情を昂ぶらせる。半ば思考停止になりながら、悠斗は走っていた。なぜ、湊は気がついたのだろう。一緒に走ったわけでも、道の途中ですれ違ったわけでもない。なぜ、気がついた？

「やめとけや、悠斗。県大会も近いし、無茶なトレーニングなんて害にしかならんぞ。やめとけ」

「うるせえよ」

声が低くなる。喉の奥にからみつぎ、掠れてしまう。

湊、煩い。もうこれ以上何も言うな。

湊から目を逸らす。立ち去ろうと身体を回す。背中に速い息遣いと真剣な声音がぶつかってきた。

「悠斗、何、焦ってんや」

振り向く。頭から血の気が引いていく。頬の辺りが板のように硬く強張る。

「なんやて？」

湊が僅かに顎を引いた。両足を踏みしめ、引いたばかりの顎を突き上げる。挑戦的な仕草に見えた。

「今、何て言うたんや、湊」

「焦ってるのかと訊いたんや」

「おれが焦る？ アホなことぬかすなや。おまえやあるまいし、なんでおれが焦らなあかんのや」

「だから訊いてるんやないか。なんで、そんなに焦ってるんやって」

——ふざけんな。叫ぼうとして声が出なかった。

焦ってる？ おれが焦っている？ 湊にはそう見えたのか？ おれは焦っている……。

背中が冷えていく。火照った身体の上を冷たい汗が流れていく。

「おまえなんかは何がわかる。たかが控えのくせに、偉そうな助言なんかするんやない。ばかやろう」

粗暴で幼稚な詰り言葉を口にしていた。湊の顔色が変わる。

「おれはおれのペースでトレーニングをしてるんや。おまえがとやかく口を出すことやないやろが。何様のつもりや」

ものすごく乱暴で稚拙な物言いをしているとわかっていった。しかし、止まらない。乱暴粗暴に稚拙に罵っていないと、湊に殴りかかりそうで怖かった。

焦っているって？ 焦っているって、このおれが？

そうだ、おまえは焦っていると悠斗の耳に囁く者がいる。湊ではない。コーチでも監督でもない。悠斗自身の囁きだった。

悠斗は焦っていた。順調に伸びてきた記録がここに来て、ぴたりと動かなくなっていた。いや、むしろ後退している。体調が悪いわけではない。心が乱れてはいたけれど、体調自体は少しも崩れてはいなかった。脚は軽く、フォームブレはないは

ずだ。それなのに、ずるずると記録は落ちようとする。必死でがんばって、何とか維持している状態だった。

スランプの経験はある。何度もある。成績が頭打ちになり、伸び悩む。身体の動きがぎこちなくなり、自分本来の走りを見失う。戸惑いもしたし、悩みもした。けれど、そのつど突き抜けてきたのだ。突き抜け、乗り越えれば、以前より力の増した自分がある。スランプは次の飛躍につながる可能性でもあったのだ。だが……。

今回は違っていた。まるで手ごたえがない。今までは、目の前に現れた壁だった。乗り越えられる壁だった。どれほど高くても、壁なら越えていける。

2 今、悠斗には越えるべき壁が感じられなかった。壁ではなく穴だ。道はそこで途切れ、奈落へと消えている。ばかりと黒い穴が足元に広がっている。踏み出せば、真っ逆さまに落下するだけだ。足が竦む。為す術がつかめない。

どうすればいい。どうしたらいい。

焦っていた。確かに、焦っていた。今の成績は、この地方ではトップレベルではある。しかし、全国となると、すでに突出した数字ではなくなっていた。オリンピック？ 笑ってしまう。世界など掠りもしないじゃないか。

もっと伸びなければ。もっと縮めなければ。もっと強くならなければ。もっと走らなければ。

それができるのか。

また己の声が囁く。

おまえに、それができるのか。目の前にあるのは壁ではない、底なしの穴だ。これ以上、前に進めるのか、悠斗。

耳を塞いでも聞えてくる。

もしかしたら、ここまでなのか。

胸の中を自分への懷疑が過ぎる。ランナーとしてのおれは、ここまでしか行けないのか。

限界。

道は途切れ、それ以上進めない。努力ではどうしようもない、ぎりぎりの境。突破しろと他人は言う。自分の限界を突破す

るのは自分しかないのだと、言う。正論だ。けれど、本物の限界を、突破しようとして突破できない限界を人は必ず持っている。壁でなく奈落への穴だ。

悠斗は本能的に察してしまった。

もしかしたら、じゃない。おれは、ここまでなんだ。

ここまでが精一杯だった。これ以上、伸びる可能性はないのだ。早熟の才能が他人より先んじて開いたに過ぎない。開ききった花は花卉を落とすしかない。

超一流のアスリートとなる者は、飛翔のための羽を持つ。壁も穴も飛び越えるための羽が生えている。

自分の背に何もないことを悠斗は悟ったのだ。

炙^{あぶ}られるようだった。絵梨に拒まれたときは、疼いて止まらなかった胸が、今はじりじりと炙^{あぶ}られている。

「悠斗……あのな」

「もういい」

身を翻し、湊から遠ざかる。

もういい。何も聞きたくないし、何も言いたくない。

グラウンドの外れにある部室の前で、ふと振り返ってみる。暮れていくグラウンドの片隅で、一つの黒い影となりながら湊はまだ **b** たたずんでいた。

悠斗はトレーニングを止めなかった。さらにながむしやりに走り続けた。くたくたに疲れてベッドに横たわると、ほんの一時、炙られる苦痛を忘れることができた。

「あんた、だいじょうぶなの。なんで、そんなに無茶苦茶な練習、せなあかんの」

スポーツ全般にまるで疎い母親にさえ訝^{いぶか}しがられ、心配された。

「おい南野、飛ばし過ぎだぞ」

監督に注意され、コーチ役の教諭から練習メニューの変更を言い渡された翌日、悠斗は足をもつれさせて転倒した。部員全員での軽いランニングの途中だった。先頭を走っていた悠斗が転び、その身体につまずいて、数人の部員が折り重なって悠斗の上に倒れこんだ。

男たちの下敷きになり、息が詰まる。右足に鈍い痛みを感じた。そのまま、コーチの車で病院に運ばれ、右足首の打撲と診断された。

「左もやってますね。親指の付け根。どうやら疲労骨折らしい。うーん、こっちはちよつと長引くかも」
シャーカステンに並んだレントゲン写真を指差しながら、初老の整形外科医は眉を顰める。

「疲労骨折……ですか」

「ですね。よくこの状態で走っていたもんだ。慢性的な疼痛があつたでしょう」

3 コーチの眉が医師よりも強く顰められた。

一カ月後に迫った県大会、悠斗の出場は当然見送られ、控えの湊が走るようになった。

悠斗は松葉杖をつき、スタンドにいた。スタンドからトラック競技を眺めるのは初めてかもしれない。

湊の走る五千の試合。絵梨の姿を見つけた。スタンドの中ほどに座り、祈るように指を組んでいた。4 ひたむきな眼差しが、トラックを走る一人の男に注がれる。

悠斗は絵梨からも絵梨の眼差しを受けている男からも眼を逸らす。胸はそれほど疼かなかつた。

湊が八番目にゴールする。コーチがタオルと水のボトルを持って駆け寄る。湊は身体を折り曲げたまま、しばらく動かなかつた。悠斗も動かぬまま、見詰める。

湊の上半体がゆっくりと起き、視線が辺りを巡る。絵梨を捜しているのだと思った。走りきつたぞと伝えるために、恋人を捜していると。しかし、湊はスタンドを見ようとはしなかった。汗でしとどに濡れた顔を空へと向ける。そして、笑った。薄雲

を突き抜けて地に降りて来る光が、その顔を照らす。

満足げな、嬉しげな笑顔。

松葉杖が足元に転がった。バランスを崩し、プラスチックのイスに倒れこむ。近くにいた後輩部員が身体を支えてくれた。「先輩、だいじょうぶですか」

「うん。すまん」

辛うじて答え、軽く手を振って見せた。そのまま、イスに座り込む。タオルを肩にかけ、こちらに背を向けた湊を凝視する。なんで、あんな笑い方ができるんだ。

八位なのに。平凡な、到底誇れるわけもない成績なのに、あいつ笑いやがった。

胸の奥からじわりと湧いてきたのは、敗北感だった。

ああ、おれは負けたのだ。とうの昔から、湊に負けていたのだ。おれは湊の半分も走ることが好きではなかった。惨めなレースをするぐらいなら、走らない方がマシだと思ってしまった。

混沌とした感情が成形し始める。安堵があった。脚にギプスをはめたとき、もうこれで走らないですむ、走らないですむ言い訳ができた。と安堵した。

おれは湊の半分も走ることを愛せなかった。

(あさのあつこ「フィニッシュ・ゲートから」による)

問一 二重線部 a 「険のある」・ b 「たたずんで」の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群のア～オの中から、それぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

a
険のある

- ア 平静で無関心な様子
イ はかなく危うげな様子
ウ 冷たくきつい様子
エ 暗く悩んでいる様子
オ 憎悪を抑えきれない様子

b
たたずんで

- ア 何度も足踏みをして
イ 緩やかな動きで
ウ 力なく首を垂れて
エ じっとその場において
オ 落ち着きなくうろついて

問二 傍線部1 「わざと陽気な口調で湊を促す」とあるが、なぜか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア あえて陽気な姿を演じていなければ、失恋の恋敵である湊に対する敵意がむき出しになってしまいそうだったから。
- イ 大切な友人である絵梨を失恋で失った今となっては、もはや湊だけが心の支えなので良い関係を築きたかったから。
- ウ 湊が話しやすい雰囲気を作り、絵梨に告白して失恋した事実についてどこまで知っているのか確かめたかったから。
- エ 失恋によって傷心している事実を絶対に湊に悟られないようにし、今までと変わらない関係を継続したかったから。
- オ 練習のペースがオーバー気味になっていることを湊に気づかれぬよう、普段の練習中と同じ姿を演じたかったから。

問三 傍線部2 「今、悠斗には越えるべき壁が感じられなかった」とあるが、「越えるべき壁」とはどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 常に切磋琢磨して高め合うライバル
- イ 走ることを通して実現させたい夢
- ウ 現状の不調を克服するための試練
- エ 具体的な目標とする順位やタイム
- オ 努力したとしても克服不可能な障害

問四 傍線部3 「コーチの眉が医師よりも強く顰められた」とあるが、「医師よりも強く」という表現の説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 練習で怪我をした右足のみならず、悠斗が左足まで疲労骨折をしていたことが思わぬ形で発覚したことで、医師とは違って選手の些細な変化にも気づかなければならないコーチの立場だからこそ感じる後悔と自信の喪失を強調している。

イ 悠斗が自分にだけ左足の慢性的な疼痛の症状を隠していたことが明らかになったことで、医師とは違って選手と堅固な信頼関係を築かなければならないコーチの立場だからこそ感じる落胆と失望を強調している。

ウ 県大会一ヶ月前にチームの主力選手である悠斗の左足に深刻な欠陥が見つかったことで、医師とは違ってチームの勝利を優先的に考えなくてはならないコーチの立場だからこそ感じる戸惑いと不安を強調している。

エ 悠斗の右足の怪我に加えて左足にも疲労による故障が見つかったことで、医師とは違って悠斗の選手生命を第一に考えてきたコーチの立場だからこそ感じる絶望と恐れを強調している。

オ 右足の怪我で病院を受診させているのに、一度も悠斗から相談されていない左足に深刻な疲労骨折が見つかったことで、医師とは違って普段から近くで見守っているコーチの立場だからこそ感じる驚きと不審を強調している。

問五 傍線部4「ひたむきな眼差しが、トラックを走る一人の男に注がれる」とあるが、「一人の男」という表現の説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分の狭い価値観でしか「走ること」や「湊」のことを考えられていなかった悠斗が、思い込みから脱却して改めて「湊」のこゝを見つめ直し、「走ること」の本質に向き合ってきた「湊」の姿と、それとは対照的な自分の姿を客観的に振り返る場面への転換を暗示する表現となっている。

イ 陸上だけでなく人間的にも優れているという驕りから「湊」に終始高圧的な態度をとり続けていた悠斗が、「走ること」に対する「湊」との思いの差を知り、自分自身を見つめ直すきっかけを与えてくれた「湊」の存在感の大きさを実感したことを読者に印象づける表現となっている。

ウ 思い通りにならないことへのいらだちや不満を「走ること」だけでなく「湊」にまでぶつけてしまっていた悠斗が、「走ること」にひたむきに向き合う「湊」の姿に胸を打たれ、親友として心から讃えるという人間的な成長を遂げている場面を暗示する表現となっている。

エ 恋と友情との狭間で葛藤するだけでなく、「走ること」に対する自身の信念の揺らぎにも直面している悠斗が、ライバルである「湊」の、純粋に陸上を愛する姿を目の当たりにして、自己の内面に誠実に向き合っていくという、若さゆえに不安定な青少年の姿を浮き彫りにする象徴的な表現となっている。

オ 今までスター選手としての誇りをもって「湊」に接してきた悠斗が、「走ること」を心から楽しむ「湊」と自分とを比較して「湊」への敗北感を味わうとともに、陸上をやめることの決心がつき、「湊」とはかけ離れた卑小な存在になつていくことを暗示する表現となっている。

問題は次の頁に続きます。

三 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

今は昔、丹波たんばの国に住む者あり。田舎人なれども、心に a 情こころある者なりけり。其れが妻めを二人持ちて、家を並べてなむ住みける。本の妻むとは其の国の人にてなむありける。其れをば、 b 飽あかず思おもひ、今の妻は京より迎へたる者にてなむありける。其れをば、思おもひ増ましたるやうなりければ、本の妻、「心憂こころし」と思おもひてぞ過ぎける。

しかる間、秋、山郷やまごにてありければ、北の方の後の山に、いとあはれげなる音にて鹿の鳴ければ、男、今の妻の家に居たりける時にて、妻に、「1 此こはいかが聞き給たまふか」と云いひければ、今の妻、「煎物いりものにても甘あまし、焼物にても美うまき奴やつぞかし」と云いひければ、男、心に違たがひて、「京の者なれば、此かやう様の事をば興かずらむ」とこそ思おもひけるに、「2 少すし心こころづきなし」と思おもひて、ただ本の妻の家に行きて、男、「此の鳴きつる鹿の音は聞き給たまひつや」と云いひければ、本の妻、此かなむ云いひける、

我われもしかななきてぞ君きみにこひられし今こそ声をよそにのみ聞きけ

男、此れを聞ききて、いみじくあはれと思おもひて、今の妻の云いひつる事、思おもひ合あはされて、今の妻の志、失うせにければ、京に送りてけり。さて、本の妻となむ住すみける。

思おもふに、田舎人なれども、男も女の心を思おもひ知りて、此かなむありける。また、女も心こころばへをかしかりければ、此かなむ和歌をも詠よみけるとなむ語り伝つたへたとや。

(『今昔物語集』による)

問一 二重線部「思おもひ増ましたるやう」の平仮名部分を現代仮名遣いに直して答えなさい。

問二 波線部 a 「情こころある者」・ b 「飽あかず思おもひ」の現代語訳として最も適当なものを、次のア～オの各群の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

a 「情ある者」

- ア 勇敢な者
- イ 面倒見が良い者
- ウ 風流心がある者
- エ 信心深い者
- オ 直情的な者

b 「飽かず思ひ」

- ア 物足りなくて
- イ 好意を持って
- ウ 一目惚れして
- エ 充分満足して
- オ 風情を感じて

問三 傍線部1「此はいかが聞き給ふか」の説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 秋の山では鹿の声が響き渡ることを知った男が、その声を聴いたことがあるかどうか妻に尋ねている。
- イ 秋に裏山から聞こえてきた鹿の悲しげな鳴き声を聞いた男が、どのように思うかと妻に尋ねている。
- ウ いつになく弱々しい鹿の鳴き声を聞いた男が、鹿は何と言っているのだろうか妻に尋ねている。
- エ とても寂しそうな音が北の山から響いたのを聞いた男が、何の音であるのかと妻に尋ねている。
- オ 別れを悲しむような鹿の声を聞いた男が、自分との別れは悲しくないのかと妻に尋ねている。

問四 傍線部2「少し心づきなし」と「男」が思った理由として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 都の出身であれば、秋の山から聞こえる鳴き声を聞いて上手な歌を詠むと考えていたのに、京都から迎えた妻が詠んだのは風情のない歌であったから。

イ 都の出身であれば、鹿の肉を食べるような卑しい行いはするはずがないと考えていたのに、京都から迎えた妻は鹿の肉が好物であるとわかったから。

ウ 都の出身であれば、山の獣のことについては何も知らないだろうと考えていたのに、京都から迎えた妻は男よりも鹿のことについて詳しくあったから。

エ 都の出身であれば、教養があり深い知識があるはずだと考えていたのに、京都から迎えた妻は鳴き声の正体さえも言い当てられなかったから。

オ 都の出身であれば、季節の移ろいや自然の景物に対して豊かな感受性を持っていると考えていたのに、京都から迎えた妻は無粋な感想しか言わなかったから。

問五 本文中の和歌「我もしかなきてぞ君にこひられし今こそ声をよそにのみ聞け」について、次の i・ii の問いに答えなさい。

i 点線部「しか」には、「鹿」と「然か（あのように）」という二つの意味が込められている。このような和歌の技法を、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 枕詞 イ 序詞 ウ 掛詞 エ 縁語 オ 句切れ

ii この和歌の現代語訳として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 私も若い妻がいない時にはあなたのことを恋い慕っていました。けれども今は私の声をあの頃のようにあなたに届けるわけにはいきません。

イ 私もかつてはあの鹿のように泣きながらあなたに愛を告げられました。けれども今はあなたのお声を他所に聞くばかりですよ。

ウ 私も山で鳴くあの鹿のように優しくあなたを慰めてきました。けれども今はあなたを厳しく責める言葉を聞かせなくてはならないのです。

エ 私もあの鹿のように泣いてあなたが離れないようお願いをしました。けれども今のあなたは他の女の言葉しか聞こうとはしないのですね。

オ 私もあの頃のようにあなたと共に鹿の鳴き声を聞いていたものです。けれども今やあなたは鹿の声に耳を傾けることを忘れてしまいました。

